

亀山巖を楽しむ会
芳彩玉辞集



御礼ごあいさつ

龜山 巖

このたびは思いもかけぬ晴がましきお催しを賜わり、御芳情のほどただただ身に泌みて有難く、一世一代の榮譽とはかかる喜びを指すのでございましょう。このような御恩に酬ゆることも、すでに落日頽齡の域に足を踏み入れ相叶いませんが、この感銘を励ましの力杖とたのみ、一日一日をさらに自らの道に沈潜いたすつもりであります。

心をこめて恭うやしく御礼のごあいさつを申しのべます。

目次

(勝手ながら到着順掲載・原文のまま収録いたしました)

亀山さんをたたう	松尾禎三	9
考現学の亀山さん	城戸久	10
かめさんのこと	山中散生	12
色紙	前田長八	14
亀山さんと漫画	石井武夫	15
69の祝杯	殿岡辰雄	16
祝詞	岩本修藏	18
四〇〇字の祝詞	相馬貞藏	19
お励ましのむだ言	湯浅四郎	21
心のこり	堀	23
亀山氏を楽しむ会に寄せて	長谷川榮一	24
祝辞	古田昂生	26
祝辞	渡邊英三	27

亀山さんの悪い影響……………小木曾新 29

美学の樹……………桑原恭子 30

憧憬の人……………山路曜生 32

正真正銘のフェミニスト……………佐々基子 33

ディレクターの極地……………新田西雄 35

半眠さん時代……………杉浦冷石 37

暖かい空気のような……………小林正明 38

祝 辞……………中井文雄 40

祝 辞……………中野二郎 42

牧羊神の会であれ……………渡辺綱雄 43

頭の上らない先輩……………有海俊秋 45

猫々展のこと……………衣浦真生 46

色紙単彩……………藪野正雄 48

69才万歳！……………織田正稔 49

半眠先生のこと……………本多静雄 50

末席からの夢想……………横井幸雄 53

冥想を楽しむ亀山巖さんを祝して……………眞島建三 54

われ風狂を愛すれば……………山科雄護 56

この人・この世界……………杉浦栄三 57

祝 辞……………吉村雄輝 59

感謝の辞……………小谷剛 60

おしゃれ寵児……………柴田史郎 61

亀山さんの面白さ……………柳田知常 63

亀山さんおめでとう……………森田義明 64

祝 辞……………浅井美英子 66

雅号とデカンショ節……………森一也 67

畏友・亀山巖クン……………寺下辰夫 69

亀山さんについて一言……………鈴木恒雄 71

祝 辞……………山本悍右 72

遊び人礼讃……………木全圓壽 74

祝 辞……………浦田忠加寿 75

お祝いのことば……………平光善久 77

受胎の日を大切に……………	兼松茂雄	78
亀山氏のたのしき……………	春山行夫	80
スタンブ由来……………	稲垣足穂	81
亀山さんの芸術……………	青木信樹	82
祝 辞……………	志摩聰	83
祝 辞……………	齋藤光次郎	85
祝 辞……………	小林威生	86
祝 辞……………	近江礼一	88
ミチの道を極める……………	浜口治男	89
お祝いのことば……………	杉戸清	92
亀山さん、若返って下さい……………	森竜光	93
亀さん八唱……………	辻寛一	94
裸婦デッサン……………	宮脇晴	95
祝 辞……………	安井取藏	96
祝 辞……………	小野圭一朗	97
祝 辞……………	小川博史	98

世に稀な人……………	伴野憲	101
わが天津襲星……………	小川双々子	104
祝 辞……………	石田秀翠	105
謙くて粹なそして大きな心の人……………	内田るり子	106
祝 辞……………	後藤敬一郎	109
亀山先生に感謝……………	市川猿之助	113
亀山さんとの交情……………	安藤幹衛	115
華麗にして粹な明治人間……………	角倉徳軌	117
結 び……………	永沼憲男	118

かめさんのこと

山中散生

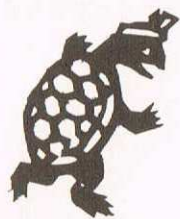
(詩人)

若いころの亀山巖は、ときどき、イナガキ・タルホの『星を賣る店』に出入りしていたようだ。ある日、私は彼の幻影がその店からでてきて、ややはにかみながら、多彩色の紙風船を片手に持ち、自轉車に乗って十字路を横ぎってゆくのを見たような気がする。もっともタルホ流にいえば「そんなことわかるものか」ということになるが、たしかに「わかるかわからないかそんなことわかるものか」というマジック的な思考が、初期時代の彼の文章や態度の中にすでに芽ばえていたように思う。

亀山巖と私との交友関係は、およそ五十年近くに達している。彼との最初の出会いがどこで、そのきっかけが何であったかは、よく思いだせない。その人

生の大部分をジャーナリストとして生きてきた彼は、さすが博学多才、その文章法も巧緻きわまりないが、私との接触は、ユーモアやパロディを溢れさせる術を心得ている優れた詩的精神の持主、亀山巖としてであった。

まもなく古稀を迎えることになる彼が、このたび『亀山巖を楽しむ会』といういかにも彼にはふさわしい名目で、多くの親しい知友にかこまれ、彼のこれまでの業績に対して大いなる祝福を受けるといふ。ありがたやと微笑している彼の例の瓢々乎たるポーズを思いうかべながら、私も率直にこの会合のために拍手を送りたいのだ。



の文化人でもある。その亀さんの漫画にもしばらくお目にか、っていない。いつどうした心境でやめられたのかわからないが、あの漫画が見られなくなったのはさびしい。「亀山巖を楽しむ会」とは亀さんを激ます会としては全くすばらしい会である。

亀さんよ、今度は喜寿の年も、あるいは米寿を迎えて、この会がひらけるよう健康で長もちしてチヨウダイ。

69の祝杯

殿岡辰雄

(詩人)

ぼくのちっぼけなネグラのある岐阜から名古屋までは、特急電車で僅か27分の近距離である。そのくせ、ぼくが足を運ぶのは、つまらん日展をのぞく時か、原稿紙を買いに丸善へ行く時か、一年にほんの兩三度、事ほど左様に無縁に近いのである。

従って「ナゴヤ」と聞いただけで、ぼくの脳裡に浮かぶお顔といえは、亀山巖大人のそれと、八勝館中店の美人女中「八重ちゃん」のそれとである。先年、彼女は廊下ですべてころんで歯を折り、今ではピカピカの金歯を入れているので、更に光彩陸離というわけだが、中京美人の典型である。

大人はそんな彼女を知るや知らずや、いつの日にか、お二人のために相会う機会を作って進ぜたならば、さしもの大人も六九六九と催して、はては、めでたくも69のラーゲにまで進展するやもはかられず——と、想像しながら、下戸の大人に向かって、下戸のぼくがせめてCORDIERのワイングラス位は高々と献じて「乾杯！」と参りましょう。

祝詞

岩本修藏

(詩人)

「楽しむ会」というのは、亀山氏に対して失礼であり、彼のまわりの者の不躰けな思いあがりがあるようで、ぼくは賛成しかねる。といって、「励ます会」も「研究する会」もおかしいし、やっぱり「楽しむ会」だろうか。ふさわしいことばが見当たらないのである。

亀山氏の作品に、はじめて接したのは昭和二年頃だった。大学一年生の時、東京の書店で買った吉田一穂詩集『海の聖母』の函に描かれたヴァイキング風の古風な帆船の絵であった。それから、もう四十幾年が過ぎた。

たまたま、『作家』二九三号(1973年5月号)「岬からの帰還」(亀山巖)の二頁大のさし絵を見つけて、それを切り取って持っている。五人の老人と船

と飛行機のある港町の風景であるが、眼の錯覚を無視した「心の記録」として展開されている大ロマンを形成している。

もうひとつ、この大ロマンの根底にある、「死の本能」とエロチシズムとの隣り合わせの状態あるいは混合状態のメソッドのことである。が、これについては、精神分析学が説明してくれるであろうし、ぼくのおしゃべりも所定の限界にきたようである。

四〇〇字の祝詞?

相馬貞藏

(中経連専務)

この三・四年の間、私は毎月一回、亀山巖さんと席を同じうする光榮に浴し

ともあれ好きな道を「雑学博士」的に続けられることは「雀百まで……」の古諺のように、やっぱりエライと思います。こういう存在は、都会的文化人としても、数少ない一人でしょう。

祝 辞

山 本 悍 右

(写真家)

初めて亀山さんに会ったとき、彼れはぼくの家の真鍮に唐草を浮きだした金銭登録器の、ガラスの窓に描かれている赤い手のマークを見て、エルンストだ、と言った。ぼくはそれがエルンスト的であることよりも何よりも亀山的であるうと思ったのだけれど。それはちょうど四十年程前のことである。以来ぼくの



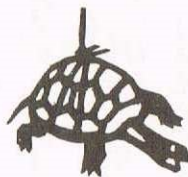
亀山さんは何かを指差している手のイメージと結びついて離れない。ついこのあいだ、あれはダメだ、あ、いうことはいけないよ。とぼくにオコったとき、その彼れから手の形を思いだしたのも、まことに恐ろしき限りである。たぶん亀山さんは、いつもぼくたちに何かを指差してきた人なのだろう。

亀山氏のたのしき

春山行夫

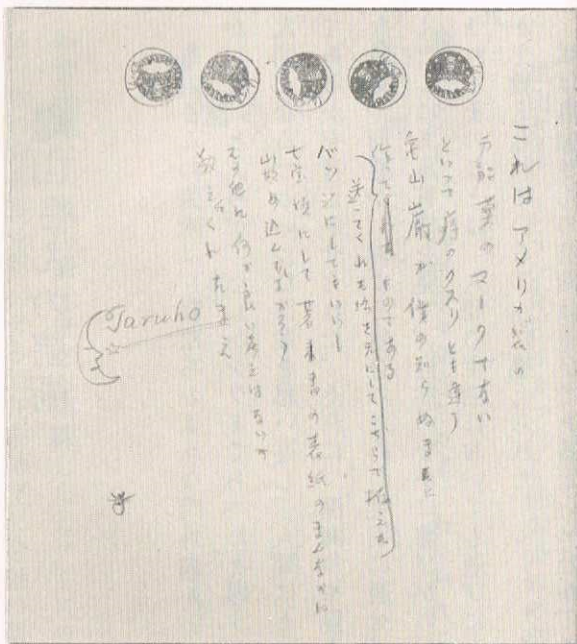
(詩人)

いよいよ悠々自適、たのしい仕事をつづけて下さい。Mr. Kameyama がレ
ースのハンカチを星に向って投げると、ルドンの天使と蝶があらわれる。この
つぎはなにがでるでしょう。



穂足垣稲 (作家)

これはアメリカ製の
万能薬のマークでない
といて痔のクスリとも違う
亀山氏が僕の知らぬまに
作って送ってくれた絵を元にして
こちらで拵えたものである
バッチにしてもいいし
七宝焼きにして著書の表紙のまんなかに
嵌め込んでよかろう
その他に何か良い考えはないか
教えてくれたまえ



祝 辞

斎藤光次郎

(詩人)

私の小学生のころ亀山半眠、大西巨口、浜田南国などという名古屋新聞の青年記者が氏神様の境内で童話をきかせてくれた。私たちはそれを大変たのしんだものである。それから十年ほど後のこと、私がT大学の学生で小石川の下宿にいたころ、突然、半眠の息子だと名乗って亀山巖君が現われた。大正十三年の秋だった。キートンがかぶっているような帽子と画稿を持っていた。その画は彼の出世作となった吉田一穂詩集「海の聖母」の装幀であった。ずいぶんふるいことだが、その亀山君が今年は六十九歳。半世紀は夢のようにすぎた。しかしいまも元気で個展をひらいたり絵の本を出版したりするという。この莫逆の友におしみなく拍子をおくって、新らしい企画の成功をお祝いしたいと思う。

世に稀な人

伴野 憲

(詩人)

名古屋生れの亀山巖氏とはハイティーン時代から詩で知り合い、もう五十年の知遇を得ています。

画家として、装幀・装画の才能は早くもその頃から現われ、吉田一穂の処女詩集「海の聖母」を装幀されたのが氏の十九歳、吉田一穂が二十八歳と記憶しています。現在高い評価に輝いているのは、その素晴らしさからいつて当然であるし、以来現在までに単行本や雑誌を含めたら千をどれだけ越えるか想像もできません。頼まれれば、余程でないかぎり断らない氏は、どれほど多くの人々を楽しませ喜ばせたことでしょう。

在りし日のご尊父亀山半眠さんが(名古屋新聞時代)童話誌「兎の耳」に據つて、方々の小学校で童話を話されました。強度の近視メガネの奥に温かさが漂い身振りおもしろく話されるのを、学童たちは喜び、楽しく聴いていた情景を私は今もこどものパラダイスのように想い浮かべます。

人を楽しませることは、このように父子二代に亘っていますが、氏はまた自らも楽しむことに徹しています。造型・創造の炎が身内に充滿しているに違いありません。ある時には舞台装置のモデル作り、またある時には飛行機の、シップのと専念——それに前衛映画作りなどと数えたらキリがありません。氏の芸術家としての地熱は、根源は一つでも噴出する様相は多彩、とにかく端倪すべからざるものがあり、傍から観て見当がつきません。

画家としてのすぐれた才能も、手作りとか造型とかの氏の天分がおのずからそうさせると想います。精神構造の領域がとても広く無辺です。その点東洋とか西洋とかでなく、全人間的とも言えましょう。ユニークな著作の数々、それに声価とみにあがる「名古屋豆本」の版元として、装幀・装画に絶妙の味わいを見せるなどと、どれを眺めてみても氏の足跡は異色そのものです。それに、名古屋の文化向上に尽された功績は大きく、例を挙げたら、これまたキリがありません。

世の人々を楽しませてきた氏を裏返して、楽しもうなどという会が、氏の69歳というこの機に持たれることは、まさに愉快でもあり不逞でもあります。記念出版の「亀山巖の絵本」は蓋世の稀本となることに想いを馳せて、併催の個展よ早く来いと、もう今から楽しんでいきます。

昭和五〇年六月九日 午後六時九分開会
亀山巖を楽しむ会・於名古屋国際ホテル

右の実行事務局これを編集・担当水谷孝

“亀山 巖を楽しむ会” 發起人

(五〇音順)

秋山庄太郎 井沢慶一 川村洋輝
 天野正英 池尾信太郎 川村要作
 赤尾慶一 梅島貞 川崎義盛
 安藤武四郎 内田るり子 川手泰二
 安藤幹衛 上原欽二 城戸久
 青木信樹 浦田忠加寿 木全円寿
 有海俊秋 織田稔 衣浦真生
 〇浅井呀一 小川博史 北王英一
 浅井美英子 小川卓爾 鬼頭鍋三郎
 朝丘雪路 小川双々子 熊井戸立雄
 東孝 荻野宗一 熊沢五六
 白川忍 塩原威 篠田康雄
 島村フサノ 志摩聡 柴田史郎
 芝野武男 齋藤光次郎 齋木寿夫
 沢村三木男 佐藤信之助

市場斗紫 小木曾新 国枝忠雄 菅谷知己
 市川猿之助 岡戸武平 黒川己喜 杉本健吉
 池田彰郎 岡田孝一 黒川明 杉戸清
 池田辰二 奥田敏子 鯨岡阿美子 杉浦栄三
 今井田勲 近江礼一 桑原幹根 杉浦冷石
 井元啓太 尾関範七 桑原恭子 〇角倉徳軌
 稲垣足穂 小野圭一朗 小山龍三 鈴木青々
 猪熊弦一郎 〇小沢喜美子 小山千鶴子 鈴木充
 石田秀翠 梶井健一 〇小谷剛 杉森久英
 石井武夫 兼松茂雄 小林咸生 関戸有彦
 石井健一郎 狩野近雄 小林正明 相馬貞蔵
 石塚元三郎 春日とよかよ 小島源作 田口福太郎
 伊藤洋平 加藤乙三郎 香村輝子 高木一郎

中杉	中野	中野	中野	中曾根	中井	長尾	豊田	殿島	殿岡	徳武	寺下	辻
徳兵衛	健次郎	健次郎	安次郎	良一	文雄	芳郎	穰	満さ枝	辰雄	登志子	辰夫	寛一
林	春山	原	浜口	長谷川	萩原	野崎	野々村	野水	清元延	丹羽	丹羽	丹羽
謙一	行夫	治男	栄一	冬珉	利夫	一男	千嘉藤	信	和子	文雄	文雄	文雄
三浦	三宅	三宅	三浦	三浦	松尾	松村	松本	松尾	松井	松井	松井	間瀬
逸雄	兼松	重光	小春	秀文	宗吾	静雄	嘉八	禎三	哲	春子	春子	正也
湯浅	保田	安井	柳田	柳田	山家	山内	山科	山本	山路	山中	山中	山田
四郎	信子	収蔵	知常	とき路	一生	雄護	清子	悍右	曜生	散生	散生	政一

坪内	多湖	館林	谷口	高坂	岩佐	岩佐	岩本	伊東	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤
節太郎	実夫	凉子	順三	泰範	伝	義徳	修蔵	嘉敏	嘉敏	清永	清永	清永
新田	竹内	竹内	錦春	錦春	加藤	加藤	加藤	加藤	加藤	加藤	加藤	加藤
西雄	日英	篤	春寿	春丸	郁平	代志	唐九郎	唐九郎	舜陶	金一郎	金一郎	巳一郎
牧野	真鳥	前田	前田	佐藤	佐々	佐々	佐々	坂井	酒井	後藤	後藤	後藤
不二夫	定忠	建三	清八	勤三	基子	一	信一	範一	登	敏夫	敏夫	敬一郎
山田	山田	藪野	八木	森島	田中	田村	滝	武山	高安	高藤	高杉	高橋
昇平	麗眺子	正雄	義徳	輝夫	千代	味智子	富夫	一雄	滋郎	鎮夫	早苗	正蔵

西川右近	西川長寿	西川あやめ	西川鯉女	西川里喜代	西川鯉次郎	西川司津	西川鯉三郎	○永沼憲男	永島卓	中山了	中山伸
	堀田良平	堀田要	本多静雄	古川克己	古川博三郎	古田昂生	藤川千代野	平光善久	日比野進	伴野憲	林文左衛門
	森竜光	森一也	森義明	村上幸隆	南正義	光田顕司	水平豊彦	宮蘭千寿	宮脇綾子	宮脇晴	宮内裕
	渡辺綱雄	渡辺英三	脇嘉市郎	吉住小多可	吉村雄輝	吉田伊子	横山朱実	横井幸雄	横井拙人	横越英一	横地さだゑ

(○印は世話人)